

昨夜から降り続く雨が足許の落ち葉を濡らしている。実相寺へと続く坂道を歩きながら、直昌は菅笠を目深にかぶり直し呟やいた。

「今宵の雨はこのほか冷たかろうて」
随伴して歩く次男の宗盛は黙ったまま頷いた。暗い麓を掠めて、数羽の鴉が渡つてゆくのが見えた。

夕闇の迫った坂道をふたりは無言のまま歩き、やがて南大門から講堂へと続く砂利道を辿り、講堂の右手にこじんまりと建つ庫裏の前に立った。宗盛が低い声で言った。

「義円でござる」

宗盛は八歳のときより、実相寺清徳和尚の徒弟となり、出家していた。天正九年（一五八一年）に実相寺は土州長曾我部軍の兵火により焼失したが、宗盛三十歳のとき、再建されている。宗盛は義円上人を名乗り九代目の住職となっていた。

引き戸をそろりと開け、ふたりはなかに入った。微かにすえた匂いがした。
大和仁兵衛義行は入り口近くの杉板に正座していた。直昌に深々と頭を下げると、低い声で礼を述べた。

「お懐かしゅうございます。此度は誠にかたじけのうございます。ご迷惑も顧みずに訪ね参りました。明朝、夜の明けきらぬうちに讃岐へと出立致します」

仁兵衛は関ヶ原の合戦で西軍につき従い戦った。その後豊臣秀頼に仕え、大阪夏の陣に参陣したが、大敗し戦火の市中を彷徨った。身を潜めながら、故郷の讃岐を目指して逃げ、奇跡的に阿波まで落延びることができた。人目につく撫養街道を避け、阿讃山脈沿いに西へくだり、上喜来庄へと辿りついたのは昨晚のことであった。

宗盛は衰弱しきった仁兵衛を庫裏へと招き入れ、家人に命じて粥を用意させた。仁兵衛の左頬には深い傷痕があった。憔悴した相貌のなかで鋭い眼光が爛々と燃えていた。宗盛は仁兵衛のその両の眼が見たであろう戦場での阿鼻叫喚を思った。

町が焼かれ、女が凌辱され、年端もいかぬ子供が斬り殺された。その地獄絵図のなかで、仁兵衛は死に物狂いで刀を振るった。

残党狩りは苛烈を極めた。街道の主だった関所には捕吏が陣取り目を光らせていた。捕縛された者は拷問のうえ鬨り殺しにあうか、その場で斬り捨てられた。

仁兵衛は山中をひたすら歩き続けた。けもの道をよるめきながら日開谷川に降り北の方角を見やると、城王山のふた瘤の峯が見えた。ふと伊賀守直昌の顔が脳裏をよぎった。

伊賀守直昌は阿波久千田城主小野寺備中守配下の城将として、父昌盛と共に阿波七箇村を治行していたが、天正十年（一五八二年）長曾我部軍の兵火により落城の憂き目に遭い、上喜来庄北原邑に移り住んでいた。

直昌壮年の頃、大旱魃に見舞われた治行地の民の憂いを鎮める為、京に登り花山院にて雨乞いの御祈願を賜ったことがあったが、その折に賀茂明神社で直昌は仁兵衛一行に出会っている。阿波の国以上に讃岐の旱魃は酷い有様であった。ふたりはともに雨乞いを祈願した。直昌の豪胆でありながら鷹揚な人柄に、仁兵衛は強く惹かれた。

「無事を祈ります」

直昌は短いが心のこもった言葉を手向け、篠突く雨のなか、ひとりで麓を下りた。

翌日の夕刻、直昌は家人から仁兵衛の最期を聞いた。早朝に実相寺を出立した仁兵衛は、国境の大影邑に於いて、捕吏に取り囲まれた。女体山へと続く山道沿いの一角に聳え立つ樹齢二百年の大銀杏の下で、仁兵衛は割腹して果てた。短刀で腹を十文字に開き、臓物を引きずり出して道にぶちまけた。仁兵衛は大銀杏の際に埋められた。黄金色に輝く銀杏の葉を雨は濡らし続けた。

その日から、この大銀杏のまわりで不思議な出来事が起こるようになった。

小学校の帰り道にその神社はあった。僕は放課後になると神社に寄り道し、境内の石碑から眼下に広がる上喜来の平野を眺めた。ランドセルを肩からおろし、夏の湿り気を帯びた風を受けながら蝉の声を聴いていると、梅檀が落とす日陰の下でそのまま眠り込んでしまうことも少なからずあった。

その日、浅い眠りから覚めると傍らに蛇がいた。祠の際から黒い頭を僅かにもたげ、蛇はこちらを見ていた。不思議に怖くはなかった。その蛇は六メートル程の体長があり、太い胴回りには白茶けた土がこびり付いていた。我が身の重さを持て余しているのか、鈍重な動きで僕の前を横切り、谷底へと続く斜面を這い降りていった。蛇の姿が見えなくなると、僕はゆつくりと立ち上がり伊賀守神社をあとにした。

診療所の先生が往診にきていた。数か月前から姉は床に伏していた。登校前になると決まって腹痛を訴えた。父が徳島の病院に連れて行き、精密検査を受けさせたが原因がわからず、姉は自宅で療養していた。日が暮れると母の用意したお粥を姉の枕許へ運んだ。姉

は布団の上でゆっくりと身を起こし、僕に笑顔を向けた。箸を持つ姉の白い手首は日に日に痩せていった。

流星群が南の空に夥しい数の星を降らせた夜、姉の容体が急変した。翌朝になっても高熱はひかず、母が診療所へ走った。僕は姉の枕許に正座して母の帰りを待った。

その時、玄関の軒先で低い読経の音が響いた。大窪寺と切幡寺を結ぶ街道の中ほどに建つ我が家へは大窪寺での結願の後、御礼参りにと一番札所を指す遍路が時折立ち寄った。お接待として母が用意した米を渡した。

その遍路は両掌で数珠をこすり合わせながら、一心不乱に読経をあげた。暫くして不意に声が止み、遍路は家に向かって黙礼し畦道を歩き去った。

やがて母に連れられた診療所の先生が黒い鞆を提げて坂道をのぼって来た。聴診器をあて、それから注射を一本打った。暫くして姉の頬に血色が戻った。

その日を境に、姉の病状は回復していった。氏神さんの秋祭りが執り行われる頃には、姉は元のように学校へ通えるようになっていた。

秋祭りの日、僕と姉は境内で催される市に出掛けた。ふたりでラムネを飲んでから石の階段をおりた。市の賑わいが遠ざかると静寂がふたりを包んだ。僕は姉に言った。

「このあいだ、伊賀さはんで大きな蛇に会ったよ」

姉はこくりと頷き、そして言った。

「山のヌシさんが里に降りてきたんかもしれんよ」

月明かりの畦道でスキの穂が風に揺れていた。

去年の夏に失職してから酒浸りの日々が続いていた。僅かな蓄えを切り崩しながら、僕は無為に半年を過ごした。居間のテーブルに肘をついて、ワイドショーを見ながらビールを飲んだ。眠くなると畳の上に横になり、目が覚めるとまたウイスキーを飲んだ。暫く前に妻は娘を連れて実家に帰っていた。伸び放題の髭を剃る気持ちにもなれなかった。着る服はいつも同じジャージの上下で通した。キッチンのシンクに積み上げられた皿や茶碗からは異臭がしていた。時折、預金通帳に目を通して溜息をついた。

同級生の佐藤から電話があつたのは、三月半ばの夕刻のことだった。佐藤は町内の数軒の飲み屋から客をまわしてもらい、パートナーを組んでいる男とふたりで運転代行の仕事をしていた。昼間は農業を営んでいたが狭小な畑の作だけでは食っていけなかった。

佐藤は電話の向こうで言った。

「どや、アルバイトせえへんか。週のうち金曜と土曜の二日だけやけど」

パートナーの男が体調を崩し入院したらしい。ふたり居ないと始まらない商売だけに、伝手をあたってはみたが、代わりのパートナーはなかなか見つからず、失業して家でゴロゴロしている僕のことを思い出したということだった。

僕は佐藤の申し出を承諾した。良い気分転換になるかもしれないという思いもあった。ちようど企業や行政の異動の時期とかさなり、佐藤の携帯には頻繁に電話が掛かってきた。僕は佐藤の運転する車の後を付いて走り、客を送り届けると佐藤を乗せて別の飲み屋へ走った。桜が散るまでの三週間ほどは忙しい日々が続いた。

その日は朝から雨が降っていた。佐藤の携帯が鳴った。馴染みの店主からの電話だった。佐藤の声のトーンが明らかに落ちた。

「大影の境目ですか。わかりました。二十分少々で着くと思います」

僕が運転して佐藤が助手席に座った。規則正しいワイパーの音を聞きながら、僕は佐藤に尋ねた。

「何か目印になるようなものはあるのか」

「大銀杏の下で待っているらしい」佐藤は陰鬱さを含んだ声で答えた。

暗闇のなかを暫く走ると、道の右側に大銀杏の樹が見えてきた。人の姿は見えなかった。質の悪いイタズラである可能性も考えられた。僕は車を大銀杏に横付けして窓越しに敷地の奥を覗き込んだ。やはり誰もいなかった。

祠の背後に一頭の赤牛が居た。この辺りは畜舎が多かった。柵を乗り越えて迷い出た牛が道路を歩いている姿を僕は何度か目にしていた。赤牛はゆっくりと前へ歩み出ると、夜空に向かってひと声吠えた。周りの山を震わす程の咆哮であった。赤牛は口から荒い息を吐きながら、赤く燃える眼で僕を睨み付けた。

「お前は何をしておる。我が身に振りかかった災厄をひとのせいにし、逃げてばかりおる」それは僕が長い間自分に向かって叫び続けた声であった。赤牛が後ろ足で立ち上がった。僕は固く目をつぶった。

五月の連休に僕は妻の実家を訪ね、この半年余りの自堕落な生活を詫びた。再就職先を探し、また一からやり直したいと妻に言った。湯呑に急須でお茶をつぎ足しながら、妻は安堵の表情を浮かべた。

妻の実家からは城王山が見えた。子供の頃に祖父と夏の城王山に登り、新田一族を祀つてあるという山頂の神社で昼寝をしたことを僕は思い出した。あの時、浅い眠りのなかで

僕は地面を踏みしめる足音を聞いた。近づいてきた足音は杉戸の前で消えた。祖父は傍らで眠っていた。

山は濃い新緑に覆われていた。幾人かの遍路が山道を歩いていた。遍路の足音に交じり、どこからか鈴の音が微かに鳴るのが聞こえた。

了